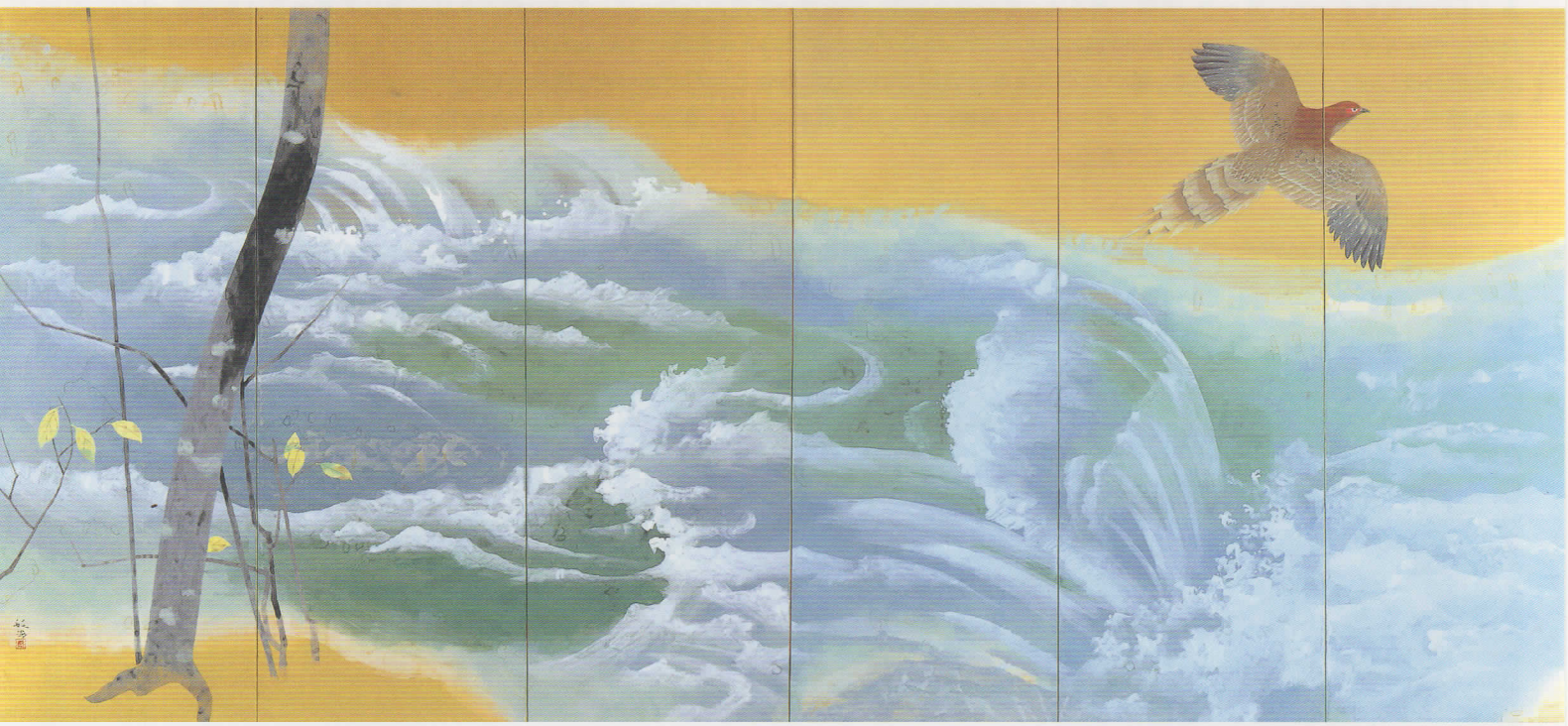
1 《コンコルドの風》(2005年、平塚市美術館蔵)

現代日本画の巨匠

松尾敏男展

2014 10.11(土)–11.30(日)



2 《流れ(左)》(1996年、長崎県美術館蔵)

平塚市美術館

THE HIRATSUKA MUSEUM OF ART

3 《火口湖》(1968 年、長崎県美術館蔵)

3.　火山による湖だから生物がいた筈はないのだが、太古の昔からそこに生物が存在したのではという思いを描いた。

4 《鳥碑》(1968 年、長崎県美術館蔵)

4.　戦中派と呼ばれる世代の私は若い頃死を覚悟し、それが昭和20年の敗戦によって生きながらえたとの思いから「生」と「死」は常に自分につきまとうテーマとなった。

(表紙上)

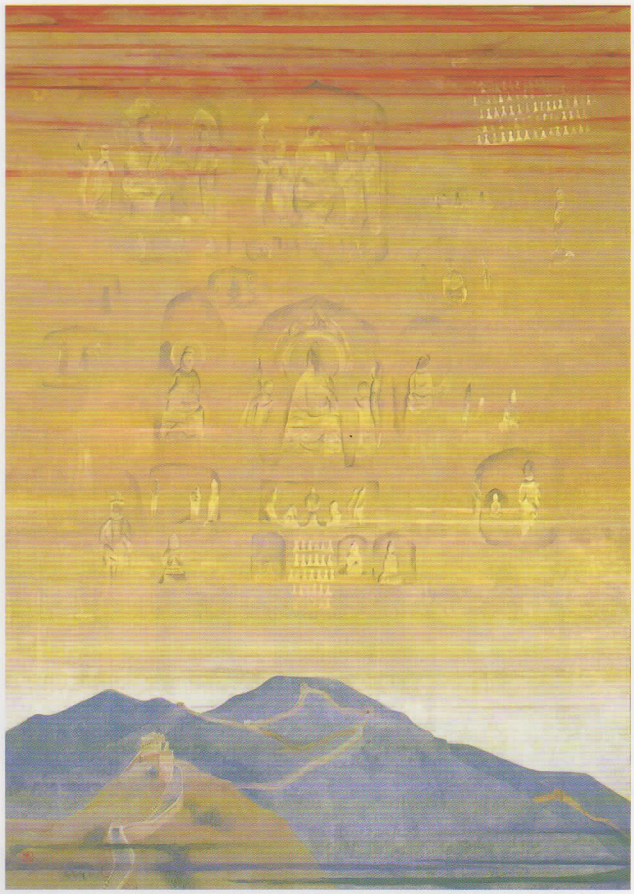
1.「コンコルドの風」パリの中心と言えるコンコルド広場。フランスの歴史を見て来た広場。激動の時代を吹いたであろう風も今はおだやかに噴水とたわむれるのみ。ヴェルネールの詩の一行。「風のみぞ知るその行末」

5.　この頃毎年インドへ通った。道端で働く人、羊を追う少年、牛を使って井戸を掘っていた人、煉瓦を頭に乗せて運んでいた女性。その人達と向かい合って写生をしていると、今の状態に何の不満も持たず悠々と己の人生を送っているこれ等の人々にむしろ豊かさを感じたのである。この題名はしばしば誤解を受けた。描かれた人々を下に見ていると思われるからであった。実はその逆で、この作の制作者である自分自身や展覧会場でこの絵の前に立つであろう、満ち足りた環境にいられる日本の人々、豊かな生活を当然としている吾々自身こそ、本当は貧しき人なのではないのかとの思いを込めたのである。

5 《貧しき人》(1977 年、長崎県美術館蔵)

6 《樹海》（1970 年、東京国立近代美術館蔵）

6.　枯れ木や怪異な鳥やミイラ。それら影の世界を描くということは、その影を生み出す根源の光を求めているからなのだ。



7 《歴程》（1984 年、千葉県立美術館蔵）

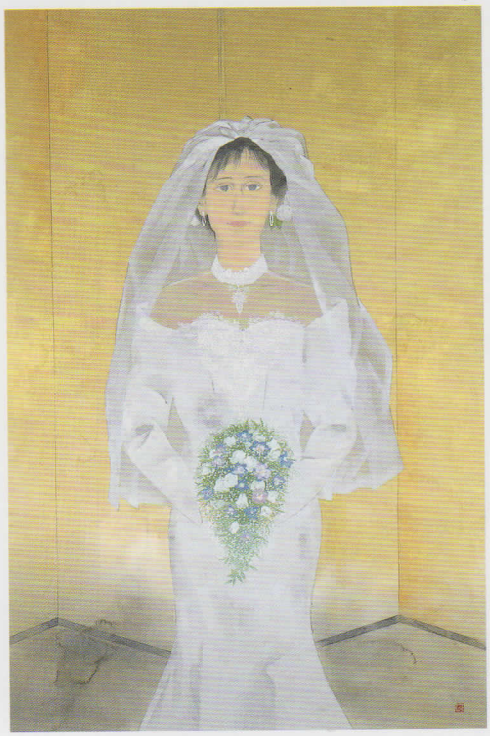
7.　洛陽の牡丹をたずねた折、そこから近い龍門へ行った。・・・中国は時間に感動する国である。気の遠くなる時の積み重ね。それを表現できないかと思って制作した。

（表紙下）

2．「流れ」流れだけは不変。日本画は象徴性の強い絵画と思っているので周辺の情景を排し、唯々水の流れだけを追い求める気持で筆を運んだ作品である。

8.　ケシのように小さな種が成長して五百台の馬車をつなぐほどの大樹になるというバーニャン・ツリー。不思議なその樹をみつめているうちに苦行の釈迦の像が重なって見えてきた。・・・その足でサルナートへ行く。鹿野苑（ロクヤオン）とも言われるその地には言葉どおり鹿が飼われていた。釈迦の遺跡として仏塔の基礎がわずかに残るだけであった。サルナートへ来られたときの釈迦はすでに苦行時代ではないので、この作品は史実と異なる自分の釈迦像なのである。

8 《サルナート想》（1978 年、日本芸術院蔵）



10 《華》(1994年、長崎県美術館蔵)

9. フランスの小都市コルマールの広場で回転木馬を見た瞬間、これを描こうと決まりました。一度乗ってみたかった木馬。私の小さい頃、父に連れられて行ったデパートの屋上の小銭を入れると何分か前後に動く木馬に乗った時、嬉しさと気恥ずかしさのまじった気持。・・・とうとう回転木馬に乗る機会はありませんでしたが、その頃の夢がコルマールで実現しました。回転木馬の呼びこみが主人公の映画「リリオム」。演じたのは当時フランスの二枚目スターだったシャルル・ボワイエ。・・・私の記憶は夜想曲のひびきでした。

10. 娘が結婚した時、親として出来ることはこれぐらいと思って描きました。音大へ通う娘は高校の時のオーケストラ部の仲間とよく夜おそくまで定期公演の練習の為、横浜から千葉の方へ車で通いました。帰ってくるまで心配で、仕事をしながらも、車の音に筆をとめて耳をすませました。・・・結婚式の朝、妻と娘は準備で先に式場へ行き、私独りおくれて車でそこへ向かいました。今夜からいつ帰ってくるかと心配することはもうないのだと思った時、涙が出ました。

9 《夜想譜》(1990年、長崎県美術館蔵)

11. 1939年前年に制作されたフランス映画「舞踏会の手帖」を観て私は夢中になった。・・・映画の見事さにも惹かれたがその背景であるコモ湖(イタリア)の美しさに驚いた。海外へ行くなど今の月旅行よりもっと夢のようなことであった時代、世界にこんな美しい湖があるのかと思ったものである。・・・1994年頃、大先輩の洋画家森田茂先生から「コモ湖へ行ってみるとよい。ベラッジオというきれいな村があって」と言われて、60年近くも前の「舞踏会の手帖」が思い浮かんだ。・・・それから8年間に4度コモ湖に行き、あのラストシーンの噴水を探し歩いたのである。2001年やっとその場所をみつけることが出来た。映画で撮影されてから63年後、あの時と同じように湖のほとりで噴水は水を吹きあげていた。「わが追想」と題した所以である。

11 《わが追想のコモ湖》(2001年、長崎県美術館蔵)

開館時間 9:30－17:00(入場は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日(ただし10月13日、11月3日、24日は開館、10月14日、11月4日は休館)

観覧料金 一般200(140)円、高大生100(70)円

※( )内は20名以上の団体料金
※中学生以下、毎週土曜日の高校生は無料
※各種障がい者手帳の交付を受けた方及び付添1名は無料
※65歳以上で平塚市民の方は無料、市外在住の方は団体割引

主 催 平塚市美術館

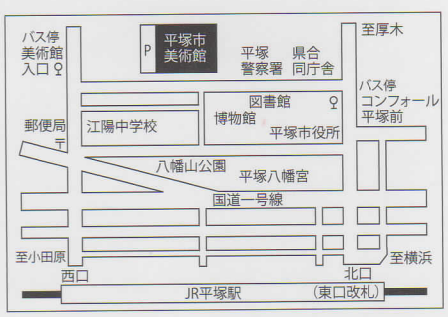
〒254-0073 神奈川県平塚市西八幡1-3-3 tel. 0463-35-2111 fax. 0463-35-2741
http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/art-muse/

協 力 長崎県美術館

講 演 会 「大観先生のこと」 松尾敏男氏(日本画家、日本美術院理事長)
10月19日(日)14:00－15:30 ミュージアムホール ＊申込不要、先着150名

学芸員によるギャラリートーク
10月25日(土)、11月22日(土) 展示室Ⅰ、14:00－15:00 ※申込不要、要観覧券

同時開催「横山大観の富士」展 (10月11日(土)－11月24日(月・振))



交通案内:JR東京駅から東海道線、または新宿駅から湘南新宿ライン(直通)で約1時間。JR平塚駅より徒歩20分。または東改札口(北口ロータリー)よりバス4番乗り場から「美術館入口」または「コンフォール平塚前」下車。無料駐車場70台。

平塚市美術館
THE HIRATSUKA MUSEUM OF ART

松尾敏男展 出品目録

No.	作品名	制作年	出品展	寸法	材質技法・形状	所蔵
1	北海	1967年	第52回院展	227.0×162.0	紙本彩色・額	平塚市美術館
2	火口湖	1968年	第23回院春季展	98.0×80.0	紙本彩色・額	長崎県美術館
3	鳥碑	1968年	第53回院展	214.0×170.0	紙本彩色・額	長崎県美術館
4	樹海	1970年	第55回院展	227.0×162.0	紙本彩色・額	東京国立近代美術館
5	海峡	1971年頃		60.5×92.0	紙本彩色・額	平塚市美術館寄託
6	貧しき人	1977年	第62回院展	166.5×364.5	紙本彩色・四曲一隻屏風	長崎県美術館
7	サルナート想	1978年	第63回院展	180.0×360.0	紙本彩色・四曲一隻屏風	日本藝術院
8	篝火	1979年	第64回院展	162.0×227.0	紙本彩色・額	
9	福州の民家	1983年	第38回春の院展	73.0×100.0	紙本彩色・額	長崎県美術館
10	I氏像	1983年	第68回院展	193.0×129.3	紙本彩色・額	長崎県美術館
11	閩江舟泊	1983年	昭和世代展	91.0×117.0	紙本彩色・額	長崎県美術館
12	歴程	1984年	第69回院展	277.0×162.0	紙本彩色・額	千葉県立美術館
13	冬の華	1986年	第41回春の院展	72.0×99.5	紙本彩色・額	
14	牡丹	1977年頃		49.3×60.0	紙本彩色・額	
15	朝光のトレド	1988年	第73回院展	171.1×363.6	紙本彩色・四曲一隻屏風(額装)	長崎県美術館
16	夜想譜	1990年	第75回院展	227.3×181.8	紙本彩色・額	長崎県美術館
17	郭公の来る頃	1992年		72.0×99.5	紙本彩色・額	
18	華	1994年	第79回院展	193.9×130.3	紙本彩色・額	長崎県美術館
19	Y先生像	1995年	第80回院展	193.9×130.3	絹本彩色・額	長崎県美術館
20	流れ	1996年		180.0×720.0	紙本彩色・六曲一双屏風	長崎県美術館
21	ミッシェル・モルガン像	1999年	第84回院展	193.9×130.3	紙本彩色・額	長崎県美術館
22	月光のサン・マルコ	2000年	第85回院展	171.1×363.6	紙本彩色・四曲一隻屏風	長崎県美術館
23	吾が追想のコモ湖	2001年	第86回院展	171.1×363.6	紙本彩色・四曲一隻屏風	長崎県美術館
24	中村芝翫氏像	2003年	第88回院展	193.9×130.3	紙本彩色・額	
25	サンマルコ驟雨	2004年	第89回院展	171.1×363.6	紙本彩色・四曲一隻屏風	長崎県美術館
26	裾野暮色	2004年	松尾敏男日本画展随行随想	171.1×363.0	紙本彩色・六曲一隻屏風	
27	コンコルドの風	2005年	第90回院展	171.1×363.6	紙本彩色・四曲一隻屏風	平塚市美術館
28	生々	2008年	第63回春の院展	90.9×72.7	紙本彩色・額	
29	鳴門	2009年		171.0×365.0	紙本彩色・四曲一隻屏風	
30	五浦波静	2009年		72.7×90.9	紙本彩色・額	

略年譜

1926(大正15)年
3月9日、長崎市に生まれる。1929年上京。
1938(昭和13)年
府立第六中学校(現・新宿高校)に入学。在校中体操競技に熱中する。
1943(昭和18)年 17歳
日本画家、堅山南風に入門。
1946(昭和21)年 20歳
日本美術院小品展に初入選。49年再興院展に初入選。以後出品、受賞。
1948(昭和23)年 22歳
東京・中央郵便局集配課に勤める(～1953年)
1950(昭和25)年 24歳
日本美術院小品展に《牡丹》を出品し奨励賞を受賞。
1961(昭和36)年 35歳
この年、作品に「不安」をテーマとする考えが生まれる。
1962(昭和37)年 36歳
再興院展出品《陶土に立つ》が奨励賞・白寿賞を受賞。以後受賞を重ねる。
1964(昭和39)年 38歳
堅山南風が日光東照宮内本地堂の鳴竜を描くに際し、三年間助手を務める。
1968(昭和43)年 42歳
再興院展出品《鳥碑》が日本美術院賞・大観賞を受賞。
1970(昭和45)年 44歳
再興院展出品《樹海》が日本美術院賞・大観賞を受賞。
文化庁買い上げとなる。
1971(昭和46)年 45歳
第1回山種美術館賞展に《翔》を出品し、優秀賞を受賞。
再興院展《海峡》が翌年度芸術選奨新人賞受賞。 日本美術院同人推挙。
1975(昭和50)年 49歳
インドに取材旅行し、その後の制作の手掛かりをつかむ。
1978(昭和53)年 52歳
再興院展出品《サルナート想》が文部大臣賞受賞。翌年日本芸術院賞受賞。
1980(昭和55)年 54歳 再興院展に《南風先生像》を出品。
1985(昭和60)年 59歳
横浜市緑区に転居。
1987(昭和62)年 61歳
多摩美術大学教授となる。
1994(平成6)年 68歳
日本芸術院会員となる。
2000(平成12)年 74歳
文化功労者に列せられる。
2009(平成21)年 83歳
日本美術院理事長に就任。
2012(平成24)年 86歳
文化勲章を受章。

平塚市美術館
SHONAN
THE HIRATSUKA MUSEUM OF ART
〒254-0073 神奈川県平塚市西八幡1-3-3 TEL0463-35-2111 FAX0463-35-2741
http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/art-muse/